



# 化石の森 上巻

石原慎太郎



かせき もり  
化石の森 上巻

●著者 いしはらしんたろう 石原慎太郎 ●発行者 佐藤亮一  
●印刷所 株式会社金羊社 ●製本 新宿  
加藤製本所 ●発行所 株式会社新潮社  
郵便番号162 東京都新宿区矢来町71番地  
電話東京 (03) 260-1111 振替東京 808 番  
1970年 9 月 20日印刷 1970年 9 月 25日発行  
定価 630 円

© Shintarô Ishihara Printed in Japan 1970

乱丁、落丁本はお取替えいたします。

化石の森  
上巻



誰か人をでも殺してやりたいほどの暑さだった。季節が狂ってしまっている。

冬からずっとこうだった。花の咲いた後に雪が降ったり、つい半月前にも山で霜の降りる寒さがあった。昨日今日はこの暑さだ。まだ真夏の陽射しもない空の下に暑さだけがたちこめている。そよぐ風もなく、薄皮のように空を覆った濁った雲の彼方で太陽が地上を茹でようとしていた。

昨日来、新聞もラジオも飽和に近いという湿度の指数をくり返し告げていた。人間たちも挨拶代りにそれをくり返し合った。それが何になる訳でもない。異常な蒸し暑さは今日に入って何年来の記録といわれた昨日の午後を、午前にとくに上廻っていた。

体を動かす度に、辺りにたちこめた湿気が肌に感じられる。わずかな動作がすぐに肌の上に、熱された湿気を汗にして貯めた。突然地上の空気の濃度が増したように、人間たちはそれについていうのをもうあきらめ、ただ口を開けて喘いで、なんとかこの状況になれようと努めていた。

濃く湿ったこの熱気の中では何をしても無駄なような気がする。何かを僅かでも試みると、眼に見えぬが熱気がはっきりと立ちはだかつて感じられる。周囲を覆いつくしたこの熱苦しい被膜

を、どこかで切り裂いて逃れようとしても手応えがない。焦だつことにも疲れて、縁の下で体をかかえて息をついている犬が利口に見えるような午後だ。

こんな時、人間たちは、人間というより獣のように見える。風のそよぎもない街頭でのゆきずりに、突然見知らぬ相手の強い汗の臭いを嗅ぎ、初めてそんな他人のいることに気づいたり、走るまま風の通っていた電車が止ると、急にたちこめる同族の汗のいきりの中で、咎めるいわれもなく互いに胡乱に見交わし合う。街の喧騒も、それを作り出した人間たち当人にも今日だけは関わりなく感じられ、その中をみんな肩をすぼめ喘ぎながら自分の道を一人で歩く。丁度暗い密林の中で自分だけの道を歩く獣たちのように。

歩こうとした横断歩道の信号が赤に変わり、立ち止った前に行く歩行者の背が胸に触れた。男は季節外れの厚ぼったい上着を手にして、背中汗に濡れシャツの地が肌について黒く縞になっている。

後ろから押し当った治夫を男はふり返り、咎めるでもなく見つめるとそのまま前を向いた。男の汗に汚れた背中はいきりが感じられ、避けて踵を返そうとした彼の背へ、彼がしたと同じように後ろから来た誰かが当って触れた。

自分がひどく険しい顔でふり返るのがわかった。見返した後ろの男の表情は投げてあきらめたように動かなかった。

周りに立って待っているどの顔を眺めても同じだ。信号を待ってはいるが、それを渡った先、彼らがそれぞれの行く先を心得ているのか危ういような気がする。車道を隔てた向うで、こちらを向いて立っている人間たちの顔も同じだった。車の流れをはさみながら熱気の陽炎の中で、ふ

と自分が大きな鏡に向って立っているような気がする。治夫はふと、向いに立った人間たちの中に自分を捜しかけた。そんな錯覚から逃れるように、彼は周りを掻きわけ別の信号に向って踵を返した。

いこうとしている場所はその大きな交叉点の対角にある。どちらの信号を先に渡っても同じことだった。

初めて降りた地下鉄駅で出口を間違え、一番離れた口から地上に出た。出て見ると、まだ少し涼しくましに思えた地下と比べて地上は、乗り込む前と同じ暑さだった。僅かな距離、地下を潜って来るだけで、辺りの様子が旅でもしたように一変する訳もないが、地下からの階段を上がった時、自分を塞ぐように立ちこめた地上の熱気の重さに、改めて挑むように立ち直して見たが、立っている自分よりも、肌に感じられるこの蒸し暑さの方が、ずっと確かな存在感があった。

人間も辺りの樹木も、道路でさえが、この厚く重い熱気の中に半ば溶けかかって仮象のようにも感じられる。暑気のための気だるさでか、自分自身までがひどく非現実的なものに感じられて来る。

方向転換は間に合って、治夫は堀端に向って交叉点を渡り切った。

濠の水も、浮んだ白鳥も、石垣沿いの立木も、何も全く動いていない。眺めていて、丁度、技術の悪い映画の合成フィルムのように、熱気の中で静止して動かぬ景色は、その周りに動いている車や人間の流れがひどくちぐはぐで非現実的なものに見えて来る。信号が変るまでの十数秒だが、垣下の白鳥は僅かに首を曲げたまま捨てられた置きもののように微動だもしなかった。

あの鳥は生きている、と逆に、彼は思った。

信号が変り、もう一度横断歩道を渡る。建物の正面玄関までの数十メートル、外国の旅行会社の事務所の広い窓が並んでいる。開いた窓の中に、花の咲き乱れた畠の中で国の祭り衣裳を着た若い女と、もう一枚、どこか北欧の、深い森の中の青い河の流れに臨んだ白い古城の大きなポスターを背景にして、黒っぽい上着を着、ネクタイをした男が坐っている。冷房が通っているのだらう、男は汗もかかず、向き合って坐った客に熱心に何か説明しているが、その光景も外から眺めると非現実だ。ポスターに写っているあんな風景が、今この地上のどこかにあるということが信じられないような気がする。坐っていた男はそれを信じてこれから出かけていこうというのだろうか。

彼はふと、明後日日本を発つという同じ大学医学部の助教授の市原のことを思った。これから市原と会う約束がある。このビルの上階にあるホテルのロビーで待ち合せ、彼に手渡すものがあった。

ヨーロッパである学会のために初めて外遊する市原は、準備の忙しさに自分の手で間に合わぬ資料の翻訳を治夫に頼んでいる。治夫が市原と同じ故郷で遠戚の人間という気安さと、語学の達人な彼に仕事を与えることで縁者に経済的に恩恵をほどこすという彼なりの自己満足もあったらうが、いずれにしろ市原が治夫を重宝にしていることに間違いはない。

頻繁に彼の仕事を引き受けていると、従兄の又従兄ほどになるこの遠縁の病理学者の内側の仕組がどんな風になっているか大よそ透けて見えて来る。

外国の最新の情報を目ざとくあたって博識を気どっているこの男も、あるところでは結構通用している様子だが、彼の博識のからくりを知っている治夫に見ると、大学や学会での講義などというものがますます味気ないものにしか見えなかった。日本語からの翻訳を依頼されたとこ

か外国に出す論文の中に、以前治夫が他の論文から訳して渡した原稿の部分が、そのまま、市原の書いた前説後説にはさまれて出て来るなどということが時々ある。

出発前、資料として翻訳を頼まれた文献は、どこで集めて来たのか、現代医学を頑強に否定しているある新興宗教団体の教義テキストとその参考資料で、現代の文明の宿業の起因は現代医学を盲信する人間の愚かさにあるとしたそのドグマはなかなか華麗で、ある部分大いに的を射て、訳しながら治夫にも興味が持てた。

教団テキストの中には外国の著名な医学者の現代医学への反省が幾つも例に引かれてあり、また日本の開業医たちからの共感同調のコメントと、その臨床例が沢山載せられてあった。どんなつもりで市原がそれを持っていくのか知らないが、外国まで出向いて行って、自分たちの専門を否定しにかかるものの考え方に大いに共鳴を披露するつもりなのか。この男にしては、心がけが殊勝ということにもなるのだろうか。いずれにしろ請け負った仕事をしながら、それを依頼した市原の内に透けて見える、現代の医者とか医学の虚構が、その新興宗教の教祖の断じるところを証すような気がした。

市原自身は、外国の著名な医学者がそうした反省を見せたことに安心して、彼の国籍を代表したつもりで同種の反省の開陳をするつもりなのだろうか。資料の中に報告を寄せている日本の医者たちにしても、結局は、依然医者として店を構えていくに違いはない。彼らがどういい逃れようと、これはパラドクスでもなく、ただの矛盾でしかなさそうだ。

尤もこの世の中では一人医者だけではなく、誰しも多かれ少なかれ同じような橋を渡っているに違いない。それに気づいても簡単に引き返すという訳にはいかないのだ。

だが、同じ資料の中に、同種の疑念からとうとう自分の選んだ道に不安を来たし、反省の末に学業を途中で放り出してその教団の布教師になった元医学生の手記が載っていた。

治夫はある種の感動でそれを読んだ。有名大学の最後のインターンまで来てそれを捨てて新興宗教に走ったというその若い男を、そこまで駆りたてたものは一体何だったのだろうか。

その男の行為の馬鹿利口、損得ではなく、一体何を賭けて、どこまで本当の自信があつてそれが出来たのかということに、ふと、他人ごととして見過しに出来ないものがあるような気がする。それは一種、羨望と嫉妬に似た感慨でもあった。

骨髓炎に冒され、むごたらしい手術を何度か受けながら、逆に希みのなくなった一人の少女の病が、医者の治療を全く否定し無視した宗教的治療で完治された時、その男の疑念は頂を極め、そして氷解した。即ち彼は、自らが選んだものを人間のために悪しき誤りとして捨て去った。そして、嘗て医学を選んだと同じ目的同じ理念のために自ら願つてその教団の布教師となった。

そこまで読むと、この男には元々、大学で医学部へ進むに当つても他人にない、少なくとも治夫にはない何かがあつたことになる。他人のために生きるなどということは、今の治夫にとってはどう考えても不可能なことがらでしかなかった。

市原にテキストと一緒に翻訳した原稿を手渡す時、この医学生についてどう思ふか訊いて見ようかと思つたが、彼の答えは知れているような気がする。同じ医学の徒といつても、市原にこの医学生が当初から持っていたような志のある筈はない。それは自分も同じことだ、と思うと、治夫には急に今まで以上に市原がおぞましいものを感じられた。

ビルの扉を押して入ると世界が一変した。涼しいだけではなく空気が乾いている。息をつきな

がら治夫は、今来がけに覗いて見た旅行会社の事務所に張られたポスターを思い出した。今になると、同じこの地上にもあんな風景が実際に在るのがうなずけるような気がする。が、すると急にまた、胸の内に険しい何かを感じられて来た。少し疲れているのかな、と彼は思った。

冷房装置が送り出す空気に表象された、自分に関わりない世界に向っての何とはない敵意をこめて、治夫はホールで立ち止り辺りを眺め直す。息をつきながらも、この突然の清涼に違和感があった。みるみる汗を吸い乾いていく肌を、何かになぶられながらだまされまいと確かめるように彼は自分の手でふれ直してみた。

ふと視線を感じて見直して見る。制服制帽をつけたビルの守衛が、外来者の中から治夫の敵意を嗅ぎつけたようにじっと彼だけを見つめている。彼は黙って挑むようにそれを見返した。

一寸の間見詰め合った後、男は他の用事を思い出したような素ぶりでゆっくり眼をそらし、横へ歩み去る。それを確かめ、更に敵意の微笑を浮べて治夫は正面のエレベーターに歩み寄る。

扉が開き、青地に金モールのついた帽子をかぶったボーイが上を指した。最後に乗り込みながら治夫はもう一度ふり返り、ホールの円柱の横にいるはずの守衛を見た。男は何故か不安そうな眼で彼を見送っていた。何かに勝ったような他愛のない快感があった。が、それもエレベーターのランプが次の次の階を指す頃には消え、足元から伝わって来るエレベーターの上昇感をこらえながら、彼は間近な若い外国女の肩から二の腕にのった雀斑に見とれていた。

約束の時間通り、四時丁度に治夫はホテルのロビーに入った。市原はバーに近い斜め奥の椅子に誰か先客と向い合っている。近づいた彼を認め、

「ああ、まだこっちの相談が終ってなくてね。悪いが二十分くらいしたら来てくれないか」

相手の男は質すように治夫を見上げた後、知らぬ氣に手元の何か書類に目を落した。

見返した治夫を、市原は体で促した。何故か彼はひどく横柄に見えた。こんな建物の中で見るせいだろうか。横柄だが、少し滑稽にも見える。

二十分ほどして戻って来てくれ、といういい方は、市原と一緒にと治夫にはこのロビーに在る資格がないとでもいうようだ。他にまだ空いた椅子はいくつもあつた。いわゆるまま踵を返した後になつて治夫は腹をたてた。が、また引き返すのも業腹で、丁度やつて来た開いたエレベーターに乗った。

暇をつぶすといつても当てがない。外の暑さを思えば建物から出る氣はしない。確かめずに乗ったエレベーターは下り出した。見上げた壁に各階のオフィスの一覽表が出てい、アーケイドが階下一階にある。そのまま地下で降りた。

地下一階の印象は、地下に似合わずひどく明るかつた。大窓にレースのカーテンを引いた上のロビーよりもむしろ明るい感じた。エレベーターをおりてすぐ右手の靴磨きスタンドの上に、奥にある理髪店の飴ん棒の看板がかかつてい、左手には外国人相手の肖像画屋の、注文客がまだ引きとりに来ない、写真を基に描いた肖像画が大小何枚もカタログ代りにかけられてある。絵の中の人物は、老いも若きも、国籍を問わずみんな同じように白い絵具の入りすぎた安っぽい肌の色をしている。不思議なもので、描き手が同じだと、顯らかに違ふ家族の人間までが親戚同士のような顔に見える。

エレベーターのホールから中に入つた商店街は通路に添つて天井に螢光燈が点され明るかつた。その明りが、居並んだ店々のどれも外国人客向けの派手な商品に映えて、一軒一軒壁板に仕切られただけで並んだアーケイドは、地上の商店街よりも洗練されて見えた。渋い紺地のビロード張

りのケースに並べられた真珠、銀器、陶器、絹の反物、国籍のわからぬ柄と仕立ての部屋着。靴屋。子供向きの玩具屋の野暮な塗りの安っぽいブリキの玩具までが、この彩光の下だと、特別製にも見える。いや、辺りの雰囲気の中に、玩具が一番似合っても見えた。

余り客の通らぬ通路で、玩具屋の店員が、客引きにとり出して見せた、電気で遠隔操縦の自動車の玩具を通路から店の中へいったり来たりさせている。

地上に比べれば喧騒の無い通路を、やっと人心地ついたように数少ない外国人客がゆっくり、一軒一軒覗きながら歩いている。覗くといっても外側からだけで、中へ入って品物を捜す客は余りない。ここでの商売にとって今がそんな季節なのか、それとも今日という日がそうなのか、どの店の店員も、表を通る人間には期待薄のように奥のケースによりかかったまま動かなかった。

治夫が通りすぎて見た陶器屋でも、隣りの刺繍屋でも、店番の女の子は同じような姿勢でうつ向いて自分の爪に見入っていた。

立ち止った治夫の気配に気づいたように眼を上げて、一瞬その眼がどこを向いているのかわからない。待ちながらすることなく、時計を見上げるような眼つきで彼を見た後、女は右と左をとり換えてまた爪を眺めている。

気づいて眺め直して見ると、明るすぎるほどの彩光の下で、広さの限られた地階にびっしり居並んだ店たちはそのまま地下に沈んだように動かず、色づけの精巧な動かぬ書割の前を数少ない通行人だけが、これも非現実なほどの速度でゆっくり通りすぎていく。治夫はふと以前大学病院の長期入院の特患の病室で見た、熱帯魚の大きくまばゆい水槽を思い出した。

右手のいき止りは、これも外人相手らしい、派手なのれんを吊った日本食のレストランだった。のれん越しに覗いた中に、客のいぬまま、天ぶらの揚げ鍋の前に板前がこちらを向いて立って

る。他所と違って、その板前だけは、戸口にさした人影にはっきり自分の仕事を意識して立ち直し、待つように彼を見返した。治夫は後ろめたさで踵を返した。

エレベーターのホールを中心に左右相對につづいている逆の側も同じような店がつづいていた。ただその途中、小さなフルーツパーラーの前で細い通路が横へ折れてい、先の奥の曲り角に主に外国の雑誌を売っている小さな本屋があった。

本屋を覗きにその角を曲ろうとした時、

「あら」

治夫は女の声を聞いた。自分にかけられたものとは思わなかったが、それがこの地下へ降りて初めて聞いた人の声のような気がし声に向ってふり返った。

通路に向って開け放たれたパーラーのレジスターの側に、女が一人こちらを向いて立っている。ふり返った彼に向ってはっきりと微笑<sup>わら</sup>いかけた。

「やっばりそうね、緋本さんでしょう」

一寸手間どったが、それでも女が微笑し直して見せる前に彼も思い出した。東京に出る前、故郷の高等学校で一緒だった井沢英子だった。見直した英子は、以前と殆ど変っていないように見える。ただ、何のためにか彼女が今着ている半袖の白い上っ張りが、彼女の印象を昔と一寸違えていた。

「わかった」

英子はい、

「わかったよ。久しぶりだね」

「久しぶりね」

改めて確かめ合うように二人は見つめ合い、英子はひどく嬉し気な顔で真っ直ぐに彼に向って近づいて来た。

「そんなものを着ているから、一寸の間わからなかった」

「ああ、これ。私そのバーバーでマニキュアしているのよ」

自分の指の爪をさし出しながらいった。彼女のそんな仕草は、なんとなくこの地階の雰囲気似合って見えた。

「東城大へいってゐるんですって、医学部。あんたのこと、後で聞いたわ。大変だったのね」

間近で親し気に眺め渡すようにしている。いわれて何故か治夫は、今までいつ誰に昔の出来事のことをいわれたよりも気にならなかった。いいながら彼女はすることについて思いやるといふより何の好奇心もないように見えた。

「あんたもあの後逃げ出して学校止めちゃったんですって。私と同じね」

英子は悪戯っぽく笑った。そんな表情は彼女を全く昔のままに見せた。治夫は以前、彼女が今のような風に笑うのを見たことがある。だが昔それは彼にひどく大人びたものに見えた。

学校時代、英子は他の生徒たちにとって異端の人間だった。大柄で、その頃から太りじな、とうに成熟してしまった体つきで、たとえ学校が命じた制服を着けていてもそれが不似合いに見えるほど彼女の雰囲気は大人っぽかった。休日、街で着物や普通の洋服を着た彼女を見て、治夫たちの眼にもその方が彼女らしく見えた。

学校の中の、非行で注視されている生徒たちの彼女はいわば領袖だったが、彼女が交際している相手は同じ年代の学生たちとは違っていたらしい。そんなグループと親し気にはしていたが、彼女の本当の遊び仲間はその中にはいなかったようだ。

二年生の半ば頃、英子は突然転校して出ていった。自発的な退学とも強制的なものとも噂があったが、いずれにしろ彼女の素行が警察沙汰になったということだった。後に二度ほど街で見かけたが、その時も制服ではなく普通の姿で、その後絶えて彼女を見ることはなかった。噂はいろいろあったが、彼女がもうその町にいないことだけは確かだった。

その頃は当り前の、俗物秀才型の生徒だった治夫も、大人になりかけの男として英子に強い印象を受けた。まだ知らぬ性について秘かに想う時、その空想の相手に、表は青いながらもう熟れて感じられる英子を選んだことが何度もあった。

ひと頃、男の学生たちの間に、英子のところへいつて手をつけて真剣に願えば、彼女は領いてその体を与えてくれる、という噂があった。他の女生徒なら、好きでもない相手にそんなことをするわけのありようはなかったが、英子にはそんな伝説が生れるほど大人びたコケットリイがあった。

噂を半ば疑いながらも、一人きりの想像に熱い夜、治夫は明日学校のどこかで秘かに彼女にそう頼み込む手だてについて、知らぬ間に真剣に考えたりしたこともあった。

彼女にとってあの高校時代の三年間は、女として全く不自由な檻の内だったに違いない。高校での彼女の居すまいには、確かに、男の学生たちの噂をそうと信じさせる、熟れてしまった自分の体を持て余しているような、彼女自身が知らずに際どい一線の上を歩いているようなものがあった。それでいて尚、同年代の男の子たちが好奇心な手出しをするのを許さぬ、距りを感じさせていた。

彼女が制服の下に下着一枚もつけていないという噂を誰かが流し、それを聞いた後、ある時治夫の眼の前で偶然英子がとけた靴のひもをかがんで直すのを見ながら、胸元から透けて見える奥